

『専修人間科学論集 社会学篇』創刊に寄せて



人間科学部社会学科長 広田 康生

平成22年に創設された人間科学部社会学科の研究紀要『専修人間科学論集 社会学篇』の創刊にあたって、研究教育上の基礎を築き社会学の精神を伝えてきた「社会文化コース」「社会学コース」「社会学専攻」そしてその紀要である『専修社会学』の歴史に改めて目が向きます。柴田弘捷教授が簡潔に『専修社会学』（19号）にまとめられた論稿や宇都榮子教授が執筆された学事歴や編集後記そして私自身の拙い経験も手掛かりにしながら記したいと思います。

社会学科の前身は1967年の「社会文化コース」に遡ります。1966年に文学部が創設され、その中で芥川集一先生に西川善介先生が専任教員として加わり（お二人ともご逝去されています）、その後、柴田弘捷教授、宇都榮子教授が赴任し、4名の専任教員で文学部人文学科の中の「教育上のグループ」としての「社会文化コース」が歩み始めました。そして1985年4月に社会調査とゼミナールを柱に、より専門的に社会学の教育を目指した「社会学コース」が生まれました。

1967年の「社会文化コース」創設から22年を経た1989年1月（1988年度）に、「社会学コース」の学内学会として「専修社会学会」が組織され、紀要として『専修社会学』が創刊されました。『専修社会学』の創刊に際して当時会長であった芥川先生は、「本誌の発行によって学生諸君を含めた専修大学社会学コース全体の学問水準が問われる」と「発刊のことば」にその覚悟を記しています。

1992年4月に文学研究科の中に社会学専攻科が発足し大学院教育が始まり、「社会学コース」の専任教員も7名になりました。1993年度の『専修社会学』（第6号）の「編集後記：宇都教授記」には、「専修社会学会」の総会に続いて「卒業論文」の各ゼミナール代表論文報告会が初めて開催されたと記されています。この記事には長い間研究教育の充実と心血を注いできた「社会学コース」の諸先生の思いが伝わってきます。大学院の第一期生の中からは、現在の社会学科の教員として赴任された先生も誕生しました。2001年4月から「社会学コース」は、1年次生から、社会学のより専門的な教育を受けさせることを目指して、「入試単位」としての「社会学専攻」に衣替えし、現在の「社会学科」の研究教育体制を構成する三つの系である「文化・システム」系、「生活・福祉」系、「地域・エリアスタディーズ」系の研究領域の原型がつくられました。

現在の人間科学部社会学科を組織する専任教員は14名です。教員それぞれの研究・教育の形は多岐、多様です。しかし、これまでの「社会文化コース」「社会学コース」「社会学専攻」が長い時間をかけて培ってきた学問や教育の「伝統」としての社会調査やゼミ教育への思いは、「フィールドから構想する社会学」の重要性の確信と、そうした構想を理論化する社会学的知性への尊敬として引き継がれていると思います。現在の社会学科では、ゼミナールや社会調査実習等の少人数教育を柱に、社会学の様々な理論に関する講義群や社会統計法・実習等の講義・実習群が配置され、こうした研究教育を実現するための社会調査実習室、社会学パソコン室等々の諸施設も、関係各位のご尽力により充実してまいりました。

学問的「伝統」とは、常に新しくされていく「伝統」です。「社会学コース」時代の覚悟としての「学問的水準を自らに問う」姿勢は、「社会学科」の中に、そして『専修人間科学論集 社会学篇』の中に、上記の「伝統」を新しい形で引き継いでいくことと確信します。

御名前は記せませんでしたでしたが社会学科が新設され、『専修人間科学論集 社会学篇』が創刊されるまで、様々なご尽力をいただいた諸先生、卒業生各位、ご父兄、大学関係各位に心から感謝し、一層身を締め締める所存です。